



ブルナイの湿地林

山 田 勇*

本年（1984年）1月1日イギリスから独立したブルナイの国際空港に降り立ったのは、4月11日。空港から首都バンダルスリベガワンへ向かう道路の両脇には国旗がはためき、町の大きなビルや役所には色とりどりの絵模様がかざられ、夜ともなればそのすべてにイルミネーションがかがやき、独立の喜びがまだつづいているような雰囲気であった。

独立式典後もマレーシア国王、オマーン、ネパール、モルジブの各外相の来訪、各国大使の表敬などはなやかな一時がつづいた。やがて5月に入り、各種の式典もおわり、道端の国旗も下ろされ、かざりつけもはずされ、また平穏な静かな日がつづいた。そして5月末からはプアサ、1カ月の断食月がはじまる。伝統的にこの国のプアサはインドネシアのアチェやバンテンのように厳格である。役所の勤務時間もふつうは午前7時45分から午後4時半までだが、プアサの間は午後2時までとなる。プアサははじめが特にしんどいらしく、10時くらいになると皆グッタリしてくる。しかし、10日もすると皆なれてきて、ごくふつうの生活になる。断食あけの6月末日は大砲とともに一度に活気づく。ちょうど日本の正月にあたるハリラヤは、回教徒にとってもっとも大きな祝日のひとつである。ハリラヤのはじまる数日前から、各地の市場や店はごったがえし、大安売りの品物を買いたる人であまる。

ハリラヤの初日の朝は先祖の墓まいりをする人が多い。皆、正装して墓を訪れ、きれいに墓のまわりをきよめる。そして、帰って親せきを訪問したり、客を迎えたりする。日本の盆と正月が一緒にきたようなにぎやかさである。この時には新しくできた宮殿も開かれ、サルタン一家が出て、国民の一人ひとりと握手をする。そして、どの家も門戸を開放し、誰かれ問わず、主人がうけいれ、飲物とお菓子でも

* Isamu Yamada, Forestry Department, Bandar Seri Begawan, Brunei

てなす。

この3カ月間、ブルナイ森林局の研究センター設立にあたって基礎的な研究細目についての協力を中心に、各地の森林をみた。詳しい調査はこれから先のことになるが、簡単にブルナイの森林の様子をかいてみたい。

ブルナイの国土面積はちょうど日本の三重県と同じ程度で、その75%が森林におおわれており、さらにその半分が原生林であるとみてよい。赤道熱帯多雨林地域に位置するため、多雨林の典型がみられる。海岸から内陸へ向かって、マングローブ、淡水湿地林、泥炭湿地林、低地フタバガキ林、山地フタバガキ林、山地林へとつづく一連の森林は、面積こそ小さいが第一級の熱帯林としての価値は十分である。とりわけサラワク・ブルナイにひろがるアラン林 (*Shorea albida*) は注目してよい。

ヘリコプターで上空からみると、凹凸のある熱帯林特有の樹冠が、平坦な樹冠のつらなりにかわる場所がある。やや淡い灰緑色に近い色の林冠が、大面積にわたってみられる。下からみると、いわゆる上層木のみがすべてアランで占められており、下層には少々、他樹種がまざるだけである。これがアランの典型的な林相である。もっともアランの多い林分をアランブンガとよび、アランがもっと大きくなった林分をアランバツ、逆にアランが小さいものをパダンアランとよんで、ブルナイでは区別している。

泥炭湿地林は泥炭の層が厚くなるにしたがって林相が変化していくことはすでに本誌でも紹介したが、泥炭の薄い方から厚い方にかけて、樹高が低くなり、樹種も少なくなっていく。

アラン林では、一斉林であるために効率よく伐採できるので、古くから伐採がはじまっている。伐採方式は、トロッコとクダクダ（木馬）である。まず湿地林へ入るには、もよりの製材所からトロッコにのる。これがない場合には歩くわけだが、湿地林は

いささか歩きづらいので、できるだけトロッコを利用した方がよい。製材所はたいてい川岸にあるので、そこまではスピードボートでいく。トロッコの所要時間は30分から1時間くらい。もともと材を出すためのトロッコであるから、歩みはきわめてのろい。歩くぐらいのスピードで、トロトロと走り、カーブになると、線路がすべて直線線路のため鋭角的にまがり、下手をすると脱線するか、ふりおとされる。たいてい片道に3回は脱線する。脱線すると、てこでまた線路にのせる。やや上り勾配のところは線路に砂をまいて上る。線路の両側はすでに伐採したあとの二次林である。大体、6年ぐらいすると樹高10mほどの二次林になるが、肝心のアランの稚樹は少ない。伐採現場で働くのはサラワクからきたイバンである。中に2組ばかり夫婦がいて、その妻が料理をつくり、10人ぐらいの男のめんどろをみている。日本の飯場のような掘って立て小屋を立て、近くに井戸を掘って（泥炭をチェーンソーで1m四方ぐらいきると、地下10cmぐらいに黒水がたえずみられる）、楽しくくらししている。このサラワクからの業者は請負いで、ある面積をきると帰って、また別のが次にやってくる。皆小柄であるが、ぜい肉がみじんもみられない、ひきしまった身体をしている。

伐採は簡単である。あらかじめ定められた区画の中の直径45cm以上の高木を次々ときっていく。きられた材はさらに長さ4mほどにきられて、木馬にのせられ、それを4人の男がひっぱってトロッコにのせる。トロッコにのせた丸太は、製材所で板または角材にひかれ、市場へはこぼれる。製材所が川下にある場合にはイカダで流される。

トロッコ道をはずれ、アラン林へ入ると、歩行はきわめて困難となる。まずやっかいなのは、*Pandanus andersonii* というパンダナスの一種であり、これが地表の60%ぐらいをびっしりとおおっており、その葉の鋸歯が実にするどい。その中を進む時は、まず中ぐらいの木を倒して、その上をつなわたり式に進むか、あるいは、棒を横にして、パンダナスを進行方向へ倒し、その上をふみつけていくしかない。次にやっかいなのが板根である。熱帯の木の板根は、ふつうはなかなかいいものである。いかにも熱帯らしくて、誰もが、熱帯の植物形態のひとつとして何らかの関心を示している。しかし、泥炭

湿地林の板根はことなる。

アランの板根は実に大きい。高さは4mくらいでそれほどでもないが、水平的なひろがりやすばらしい。板根と板根の間にすき間ができるが、そこにも根がからみ合って、ちょうど、幹のまわりの地面上数十cmのところはかなり粗い目のアミをかぶせたようになっている。そして、その上にリターが蓄積している。したがって、その板根のアミ目の上を慎重に歩かないと、リター層をつきやぶって穴におちることになる。実際の林床は、板根のはるか下にあるから、おちると小さなケガをすること請合いである。このふたつの要因に加え、この泥地林は暑い。全く風がない。したがって、ほんのわずかの距離を歩くにも全身ダクダクの汗である。太っている私だけかと思いきや、こちらの人も、またサラワクの人も、やはり全身汗にまみれている。低地フタバガキ林では、時折、かわいた風がふいて心地よい時もあるが、泥炭湿地林ではまずそれは期待できない。ただ時折、雨のあとなどにやや強い風がふき、その時よく木が倒れる。木が倒れたあとには、大きな池ができ、しばらくするとその中に魚が住むようになる。これもまた、おもしろい現象のひとつである。

泥炭湿地林のみでなく、ブルナイの熱帯林には、いい林が多い。どれもこれも十分時間をかけて研究すべき対象としておもしろい。いままでブルナイ政府は石油一本にたよってやってきたが、長い将来のためにさまざまな可能性を模索している。独立後の大きな課題のひとつに森林資源の活用がある。むろん、小面積ではあるので、輸出などすれば、立ちどころに資源はなくなってしまう。したがって、保存を基礎とした息の長い研究の場を提供することが考えられる。

イギリス時代におこなわれてきた研究をひきつぎ、さらにそれを発展させるために、いま、森林地帯の中心にほど近いスガイリアンの地に、森林研究センターがブルナイ政府の手で建設中である。そこを中心にして、ブルナイと日本との協力体制がとられる予定になっている。熱帯の森林にはまだまだ未知なことが多い。というよりも、わかっていることが少なすぎる。ブルナイの森林が、将来、熱帯林研究のひとつの足場となることが期待される。(農林水産省関東林木育種場。JICA派遣専門家。在ブルナイ)